随感　倾诉的勇气和接受的勇气

在迎来二次大战结束 60 周年的今天，在亲身经历过“战争”这段历史事实的人越来越少的时候，人们开始担心那段“记忆”将会风化。

我们在前一期里向大家介绍的《在日中两个国度的夹缝中求生存》这本口头寻访录中，有一位残留妇人对于她在中国的残留经历，说了下面这段话，“家里的孩子们也都 ··· 并不知道那些事情。那是我不想讲给孩子、孙子们听的。”但同时，这位残留妇人又鼓起勇气讲述了她意欲封存的“记忆”，“因为我觉得在日本，很多人都不知道中国残留妇人、残留孤儿是一些什么样的人”。

另外，在这本口头寻访录中，一位作过寻访的人留下了这样的感想，“作为在容易迷失自我的现代社会里生存的自己，通过寻访，让我重又回到了‘作为一个人’，其‘生命之珍贵’和‘活着之尊严’这个出发点”。也有人指出“坦怀虚心地倾听一个人讲述，它可以帮助你扩展对于那个人及其周围的人们是如何生活的这一想象空间…，同时还可以让你窥视到中国归国者的一个侧影”。

对于残留妇人带着勇气讲述的经历和故事，我们难道不应该带着勇气和意志去接下那一段“记忆”的接力棒、并且把它传给后人吗?

随感　語る勇気と受け止める勇気

戦後60年を迎える今日、戦争という歴史的事実の体験者が少なくなっていく中で、「記憶」の風化ということが言われています。▼前号でご紹介した聞き書き集『二つの国の狭間で』の中で、一人の残留婦人が中国での残留体験について、「うちの子どもたちも…そんなこと知りません。子どもにも孫にも、言いたくない話です」と語る一方、「日本では中国残留婦人、残留孤児とはどういう人達かおわかりにならない方が多いのでは」と、封印したい「記憶」を勇気を持って語っています。▼また、この聞き書き集の聞き手を務めたある方は、「自分自身を見失いがちな現代を生きている私を、『命の重さ』『生の尊さ』という“人としてあること”の原点に立ち戻らせてくださった」という感想を記しています。「一人の人間の語りを虚心に聞くこと、その人に連なる人々の生き方に想像を広げていくこと、…そこから中国帰国者の姿の一つが見えてくる」と指摘する方もいます。▼残留婦人が勇気を持って伝えてくれたことに対して、後世代の人々には、「記憶」というバトンをしっかり受け止め引き継ぐ意志と勇気が求められているのではないでしょうか。